

自分をつくる道

坂口立考

澄み渡った秋の夜空にくっきりと浮かぶ月を見上げると、すっきりとした自然な気持ち湧いてくる。私も、人生を「自分で自分をつくる」道として歩んでゆきたい。谷川健一先生のように。先生もまた敬愛の心を抱いた偉大な先人のように。生涯、探求し、独創的な仕事をする人間でありたい。

それが今、ちょうど五〇歳の誕生日を迎える私の切実な願いだ。生まれてから今日までに、私には六三七回の満月があった計算になる。月数にすると満六〇〇ヶ月。その半分にあたる三〇〇ヶ月、私は谷川先生のことばに勇気づけられ、励まされてきた。先生の著作を通して、私はいつも自分との強いつながりを意識できる心の師を持った。先生のことばに支えられ、独りで学んでいるという強い実感が不思議な力になった。これからの三〇〇ヶ月は「自分で自分をつくる」道をしっかり歩いてゆこう。毎日をもっと大切に、ひと月、ひと月、今自分の歩く道のりを確かめながら。そのために時々夜空を見上げて、満ちては欠ける月を眺めることにした。月の姿は明日には必ず少し変化している。いちばん近い未来の姿を確実に予想できることが励みになる。私の未来が三〇〇ヶ月より多いか少ない

かに関わらず、自分が望めば月は生涯、私の友でいてくれるはずだ。

初めて出会った先生の著作は『目と耳の結婚』である。玄海灘にそそぐ遠賀川流域は私の生まれ故郷で『青銅の神の足跡』の舞台でもある。鹿児島の方の祖先は遠い昔に南からやってきたと思われるから、『目と耳の結婚』ということばで象徴的に表された日本の生い立ちは、自分とも直接つながっているという感覚を持った。以来、私は寸暇を惜しんで先生の著作を読むようになった。読めば読むほど、論証のエッセンスを凝縮させた表現が随所にちりばめられた文章に想像力をかき立てられ、スリリングで知的な興奮を覚えた。どこをとっても明快な方法論と、丹念で徹底的な検証作業に裏打ちされている。圧倒的な説得力と、私もその場に居合わせているかのような臨場感があった。そして私を最も魅了したのは、実証的な方法の上に想像力を働かせれば、目の前の世界とつながることができるという秘密が惜しげもなく語られていることだった。自分という人間が、大地の母とも、いのちの宇宙とも、確実につながっている。私にもそういう意識が芽生えてきた。

私は先生の本の外に出て、「地名、遺跡、神社、伝承」という要素の組み合わせによって、歴史や文化現象の構造を捉えてみようと思った。たとえば、ピレネー山麓の川、泉、ドルメン遺跡、ロマネスク修道院。神社ということばを教会に置き換えればよい。「白鳥の伝説」と物部氏の足跡を追い、埋められた銅鐸の意味を考える、といった構図をもった事例は世界各地にたくさんあると思う。想像を深めることで眼前の世界と自分だけのつながりをつくることができるのだ。

私は次第に、「自分で自分をつくる」ことを強く意識するようになった。『独学のすすめ』で私は先生に一層強い親近感を抱いた。私もこどもの頃から一貫して、学校でする勉強にほとんど興味を持た

ず、何でも自分で自由に勉強しないと気が済まなかった。人の考えないことを考えたい、誰もやらないことをやりたい。だが振り返ってみると、そんなことばかり考えているうちに人生最初の三〇〇ヶ月近くが過ぎていたことになる。何かオリジナルな創造をするためには、自分には確固たる基盤がない。本格的な独学を始める以外に選択肢はなかった。この時、日本を離れて独りで暮らす環境が手伝って探求心という心のろうそくに火がともった。自然科学の古典をはじめ、丹念な観察や深い思考を鍛えてくれそうな書物に自分の持てる時間のすべてを投入する。そして自分の発想に必要と思いつくものはすべて記録する。いつか自分だけの世界像をつくりたいという不明瞭な目標だけだったが、自分で考える練習の助けとなる、断片メモづくりは確かに始まっていた。

そんな時、先生の「独学者たれ。」ということばが体の中にずっと入ってきた。独学者こそ真に独創的な仕事をする、偉業をなした先人はみなそうだ、という。自分で始めればよい、自分から始めよ、自ら学び取る姿勢によってこそ人は学ぶのだ、と。ただし、独りよがりにならないよう自分の先生を保持。私は素直にそのことばを信じた。自分の足で歩く。耳を澄まして聞く。目を凝らして見る。自分で考える。先生のやさしいまなざしが私に向けられているような気がした。この時の新鮮で清々しい気持ち、私は決して忘れることはないだろう。そうやって学ぶことがとても愉快なことに思えた。道は長くてつらそうだとか、ものすごい覚悟がいりそうだとか、自分にはとうてい到達しそうもない、という思いはかけらも湧いてこない。望めば、自分で自分をつくる道がある。そしてそれは自分だけの道である。思い悩むことも、躊躇することもない。独学といっても、自分という人間はひとりしかない。だから、自分で考えればよい。私はそのことを理解した。

独学ということばを外側から考えようとすると、こういうことばが浮かんでくる。動機、目標、覚悟。量、方法、継続、成果。観察、構想、実証。モチベーション、エネルギー、インスピレーション。きつと、そういうところからものが突然始まるのではないのだろう。だから、自分の内側から湧いてくる、もっと自然なことばを頼りにしよう。自然、人間、いのち。世界、宇宙、過去、未来。共鳴、共感、想像。喜び、愉しみ、感謝。探求、創造、表現。勇気、信念、愛。それだけで意味のある、大切なことばを並べてみるだけで、心が自然に広がっていく気がする。自分がこれらのことと直接つながって生きていると思うこと、それを素直に信じること。「自分で自分をつくらう」という気持ちになって心を開けば、あとはその「自分」が、自然につくられていくのだろう。

思いがけないことに、私の母を通して先生から「海の宮」に誘っていただいた。先生の著作に出会って三〇〇ヶ月中、最後の五〇ヶ月は、私にとつては奇跡のようなできごとだった。先生からのこの贈り物によつて、つながりを信じる自分が自分をつくるという確信に変わった。私は宇宙のひと粒であり、その私というひと粒もまたひとつの宇宙である。先生とつながることによって私は世界とも、自分の未来ともしっかりとつながることができた。

先生に直接お会いしていつかお話しする機会があったら、ぜひお話ししたいと思っていたことがある。『妣の国への旅』には、先生の幼少時代の「キリスト体験」が挿絵つきの二ページで綴られている。イエスキリストに強い親近感を抱いた、という一文に私は強烈な衝撃を受けた。なぜならば、そこに載せられているエピソードのすべてが、私自身のキリスト原体験と酷似していたから。小学校に

あがる前、ルーテル教会での鮮烈的な出会い。イエスが十字架を担いながらゴルゴタの丘をのぼる姿。そのけばけばしい原色の宗教画を飽きずに眺める。毎晩イエスの夢をみようとする。ノートの端っこにイエスの姿を描く。そのイエスはトランプの王様の顔に似ている。父の書斎に入って世界美術全集からキリストの磔刑図のあるページを破りとる。これらはすべて先生のエピソードであり、また私自身のものである。それどころか、私がこれまでずっと自分の心にしまいこんでいた密かな思いがそこに綴られている。昔、私には家の小さな神棚に毎晩お祈りするという儀式があった。私の祈りのことばは「イエスキリストのお話は本当ですか」だった。いまだに、このことばの意味をうまく説明できない奇妙な「祈り」だったが、それが私の唯一の祈りであり、かなり長い間、おそらく一〇〇ヶ月くらいは続いただろう。ルーテル派の礼拝や聖書の授業がある中学時代の文化祭で、私は独りで教室ひとつを使わせてもらい、「イエスの一生」という渾身の絵作品を発表した。先生は「イエスは心やさしい人でした」ではじまる作文を書いたと別の本で読んだが、私の作品のはじまりもほとんど同じだった。その後私も、キリスト教という宗教そのものを受け入れることはなかったが、今でも新約聖書と修道院、そしてパスカルの「パンセ」にも特別な思いを抱いている。

谷川先生とのご縁があり、その力に助けられて私は、目に見えないつながりを信じるようになった。信じることで自分をつくることができる。この先、「自分で」が少しいへんな時にはいつも月がみていてくれる。それにきつと、ルオーの描いた深い輪郭の、イエスキリストのような顔をした先生が私の夢に現われて、海の宮で私と語らってくださいるに違いない。